

## 1 迹門の二乗作佛

二乗作佛の作佛というのは、成仏と同じです。すでに触れましたように二乗というのは、釈尊の声をじかに聞く直弟子とその流れをくむ小乗仏教（部派仏教）に属する人々。声聞乗の人々と、人里離れた山野で修行をして、独りで十二因縁の理を観じて悟りを開こうとする縁覚（独覚）乗の人々です。この両者は絶対に成仏できないとたびたび、いろいろな大乘仏教の経典で繰り返し叫ばれているのに、法華経ではただ一仏乗のみがあり、二もなく三もないとして万人の平等を訴えているのです。他の経典とは、まずこの点で大きく違うのです。

人間の平等をうたわれたのは、そもそも釈尊その方であり、古代のインドの身分制度であるカースト制度の根幹を揺るがす教えを説かれました。しかし、仏教教団が確立すると、次第に出家中心の教えに傾いて実質的な差別が教理の中に生まれてきたのです。それを元に戻したのが、大乘仏教ですが、大乘の優位性を主張するあまり、小乗の部派仏教の徒を永不成仏と決めつけました。

これを法華経ではさらに否定をして一切の人々に仏性があり、一仏乗によって成仏できると保証をしているのです。

すべての人々が仏性を持っているという「一切衆生悉有仏性」という経文は、涅槃経というお経に出ているのですが、その思想は法華経の一佛乗の教えと通じるものがあります。仏性というのは仏となる可能性、仏の家柄に生まれたものがもつ仏としての素性、という意味ですが、これが万人にそなわっているとするのが一切衆生悉有仏性という教えです。

なぜ、小乗部派の教えにしたがっている、それも釈尊の直弟子達が不成仏と決めつけられたかと申しますと、あまりにも利己的だからという理由です。小乗部派仏教では一般に自己の修行に専念して他の救済には関心を持とうとはしないのです。それというのも、修行そのものが大変に難しいので、他者の救済にまでは手が回らないからともいえます。

小乗部派の修行は、後世まとめて、三十七菩提分法と呼ばれますが、それは、四念処、四正勤、四神足、五根、五力、七覚支、八正道で、その数を足すと三十七になります。これらは、互いに重なりあうのですが、五根、五力の中には「信」というものが含まれ、難しい仏教とその修行の導入の役割を果たすものとしては讃えられています。けれども、それはその後の修行へ導入する入口となるもので方便として説かれているに過ぎません。これらの修行の体系の中で最もよくまとまっているのが「八正道」です。八正道とは、以前にもふれたように、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八つで、このうちあくまでも修行の中心は正定という最後のものです。ここでは信心とか信は特に挙げられておらず、正見（正しい見解を持つ）の前段階として仏教を信ずることがあるはずですからそこに含まれるといわれているに過ぎません。正定と言うのは、正しい禅定という意味で、三昧と言うのも同じで、あることに専心して集中すること、特に精神を一点に集中して、瞑想に耽けることです。インドでは仏教が説かれる以前から、一般の修行者も禅定をすることが広く行われ、釈尊も悟りを得られる以前にウッタカ・ラーマプッタとアーラーラ・カーラーマという二人の仙人に順次ついて修行されたのです。これは、釈尊が出家をされた直後の事で、たちまちの内に二人の仙人の達していた境地に到達をしてしまい、これに驚いた仙人は一緒に釈尊に教団の経営をするよう申し込まれたのですが、禅定から醒めた後に、又、苦悩に悩まされ現実に引き戻されることから、この禅定に飽き足らず、辞退をして仙人のもとを離れて自らの身体と精神に苦痛を加える苦行にこころざされました。この禅定というのは、宗教的な実践ですから、したことがない人はどんなものであるかは知りようもないし、その境地も解るはずがありません。しかし、インドの外教の禅定と仏教のそれとでは微妙なそして重大な違いがあるようで、そのために釈尊は二人の仙人のもとを去られたのです。そして、結局、苦行も自分の身体を痛めるだけで智慧や悟りと無縁という結論に達した釈尊は、やはり菩提樹の下で釈尊独自の禅定によって悟りを開かれたと伝えられています。その釈尊の禅定こそ、正しい禅定で、これを

正定といい、初禅、第二禅、第三禅、第四禅の四つの段階に分けられています。これが後世の部派仏教になると、さらにこの四つは欲界の四禅とされ、色界の禅定、無色界の禅定など、さらに段階があるとされるようになりました。（欲界、色界、無色界を三界という）

けれども、実際、これらの禅定をすべて実習して、一段、一段、階段を上るように高い境地に達することはなま易しいことではないでしょう。何年かかるか、何十年かかるか分からないし、第一、現代では修行に費やすそんな時間もないでしょう。それどころか、末法の時代には悟れる人などは、一人もいないという見解を御祖師様は法華経などによって主張をされています。

しかし、少なくとも釈尊の直弟子とそのあとの末裔達は、悟りを得ることが可能とされていただけに、この禅定に没入したのです。しかし、一方、自己の修行に専念するあまり、一般の苦しみ嘆いている多くの民衆の救済にまで目は向かなくなるのは当然の事です。

しかも、後世の弟子達が禅定の修行によってめざすようになったところは釈尊と同じ悟りではなく、阿羅漢果という果報です。その理想は灰身滅智といい、体を灰にして智のはたらきを停止することです。つまり、「無」というのが理想であり、何回も何回も人や動物に生まれ変わっては、煩惱に迷い、地獄に堕ち、餓鬼界に生まれるというような輪廻の存在から脱出するためには無となることだけが必要とされたのです。

今の日本は、といってもごく最近だけですが、世界に冠たる経済大国で、多くの人の中流の上、または上の下という比較的裕福な生活を享受しているという意識に浸っています。今の日本では、「人生は苦なり」と感じる人はネクラなどといわれてしましますが、インド人はもともと思索に長けていた上、環境からいっても摂氏四十度、四十五度を越える気候、水不足、飢饉、疫病、貧富の差、戦乱といずれも、一部の王侯を除いては現世が地獄そのものと映る人々の方が遥かに多かったでしょう。ですから、とにかく、もう二度と生まれてくるのは厭だ、将来永遠に続く輪廻の轍の中から

脱出したいと望む人が多かったのです。その脱出の方法が解脱ということですが、小乗部派では虚無的な傾向が強く、解脱とは無になることと誤った解釈をしてしまったのです。人間の生そのものを否定して一切の欲望、煩惱を断じ尽くして克服しようとするのです。食欲がなければ栄養の補給もできず、生物としてのヒトは個体を維持することができませんし、性欲がなければ種としての人間は滅んでしまいます。なににしたいという欲望や煩惱の根源は、生そのものにあるのですから、煩惱を断じ尽くすことは人間としての生存の停止を意味するのですが、ついにそれが小乗仏教の徒の究極の目標になってくるのです。

これに対して、大乘仏教は輪廻から脱出しようとして解脱や涅槃に執着して自らの救済に専念することこそが迷いであり、涅槃から抜けでて他の救済に心がけることが実は涅槃の姿とするのです。（不住涅槃、無住処涅槃）

ですから、現実を重視して利他を修行としますから、無をめざす虚無観に陥ることなく、生存に必要な人間の本来の欲望も、修行を支えるものであるとして積極的に価値を認めています。というのも、大乘仏教では普通の人間でも仏の境地に到達できるという教えが前提ですから、すべてが阿羅漢を理想とする小乗の教えとは違ってくるのです。しかし、現実を重視するといっても、煩惱に翻弄されどっぷりつかって迷ってはいやはり、成仏をすることは思いもよらないので、生死を脱した涅槃界にも輪廻をする生死界にもとどまらないというのが本来の不住涅槃という意味です。

しかし、突き詰めていくと大乘仏教では、生死即涅槃、煩惱即菩提といい、維摩経には煩惱を断ぜずして涅槃に入る、淫欲是道、淫欲そのままが道であり悟りであるとしており、これは大智度論にも説くところですが、煩惱といっても、もともと実体のない空なるものであるから煩惱即菩提だと言うのです。

また、天台大師も、この「即」ということを強調され、どんな存在もその中に無限に自己以外の内容を含み、善の中にも悪が、仏の中にも地獄を具え、地獄にも仏の世界を具しているとしています。迷いの生存、輪廻を繰り返していく生死の世界が実は、

そのまま涅槃の世界であるというのは、理解しがたいことですが、本来あらゆる人間に仏性があり、成仏を本来、理屈（理）の上ではしているのであるということになれば、やや諾けることです。

このように、大乘仏教すなわち菩薩乗と小乗部派、すなわち声聞乗、縁覚乗とでは人生観も、修行の仕方も、仏に対する見方も天地雲泥の差があり、同じ仏教といっても、全く相反するものでした。

そこで大乘仏教から盛んに小乗部派に対して非難を浴びせるのです。ついには、誰でも成仏ができるけれども、ただ二乗だけは焦種、敗種として成仏はできないというのが大乘仏教の常識的な説となったのです。

二乗作佛の説は、この大乘一般の説を逆転するもので特に、法華経迹門を通じたテーマとなっています。そのうち、方便品は迹門の中心で、これを見ると次のように説かれています。

「如来は但一佛乗を以ての故に、衆生の為に法を説きたまう。余乗の若しは二、若しは三あることなし。」

（平楽寺版 法華経開結 100頁）

「無量、無数の方便、種々の因縁、譬喩、言辞を以て、衆生の為に演説したまう。是の法も皆、一佛乗の為の故なり。」

（同上）

「舍利弗、十方世界の中には尚ほ二乗なし、何に況や三あらんや。」

（同 102頁）

「諸佛方便力を以て、一佛乗に於て分別して三と説きたまふ。」

（同 102頁）

「十方仏土の中には、唯一乗の法のみあり。二なく亦三なし。」

（同 107頁）

このように、繰り返し繰り返し、仏の教えとしてあるのは唯、一佛乗のみであって、声聞乗、縁覚乗、菩薩乗というものはない。ただ、諸々の衆生に種々の欲や執着があ

るのを知って、方便の力によってそれらの人に合わせて法をといたのであると、述べておられるのです。では、真実はどうかということ、それはこれから法華経の教えとして説く事柄である、時期がくれば必ず、仏は真実の説を述べるのである。今までは、この仏の真意を隠してきたのであると述べられるのです。

「諸佛は語、異なることなし。仏の所説の法に於て 当に大信力を生ずべし。世尊は法久しうして後、要ず当に真実を説きたまふべし」 (同 9 1 頁)

と、説かれています。

この方便品等の教えは、舎利弗尊者という二乗の中の最高の智者で代表である御弟子にむかってされたもので、仏がこの世に出現された一大事因縁ということ説かれます。仏がこの世に出現されたのは、仏の知見を開かせるためであり、示すためであり、悟らせるためであり、佛知見の道に入らせるためである(開示悟入)と説き、それによって舎利弗は、灰身滅智して阿羅漢果を得ようとしてきた間違いに気がつき、これを改めるのです。

そして、舎利弗は最初、仏の説かれる処を聞いた時は心中、おおいに驚き疑い、仏が魔となって心を悩ませ乱しているのではないかと思いましたが、後で、仏の本心を知り大變に喜び、「諸々の疑悔を断じ・・・今日、乃ち、真に是れ仏の子なり、仏の口より生じ、法より化生して、仏法の分を得たり、と知れり」(譬喩品)と感激するのです。

ところが、釈尊はそのように悟りを開くことができたのは、「己が智分に非ず」と、「舎利弗よ、あなたが仏語を信受したからであり、智慧を働かせたためではない」と言われます。

このことは、法華経が二乗作佛を説く特別な教えであるとともに、「信」とは反対の「解」によっては入ってゆく教えではないことを明かされたものです。

開導聖人は、これを御教歌に

舎利弗はわが智を捨て仏智をば 信ぜし故に真の智者なり ( 1 3 8 0 )

舍利弗もちゑを捨てぞ仏なる 我等がちゑの何にならふぞ ( 1 3 8 1 )

と、詠まれています。

法華経ではこの後も、譬喩をもって、また因縁談をもって、理解が遅い人々のために迹門の二乗作佛の教えを重ねて説いてゆかれます。

ともかく、二乗の人々に成仏を許し、さらに堤婆達多品で極悪人とされる堤婆達多の成仏、八歳の龍女(畜生であり女性)の成仏を認めるなど、法華経は大乗経典の中で独特の、他の経典と違った説を展開しております。

今は、どんな人であっても職業であっても、民族であっても、女性であっても、そのことを理由として差別を受けることは、日本では少なくともたて前の上ではないでしょう。

でも、実際は差別はなかなかなくなりません。日本における部落差別や外国人に対する差別、世界的にみれば人種差別など、根絶にはずいぶん時間がかかるようです。日本の仏教の中でも、部落出身者に対する差別戒名が、ずいぶん以前からつけられてきたことが分かり、一時、大問題となりました。御祖師様は「日蓮は旃陀羅が子なり」と、自ら漁師や屠殺を生業とする人々などにつけられていたインドのカースト社会の最下層民の蔑称で不可触賤民を意味する語を、堂々と使用してその出自をむしる誇りにしておられることは日本の仏教の開祖達の中でも異色の存在です。

インドの仏教でも、釈尊の真精神とはなれて差別的な教えが行われていた中、法華経は徹底して一切の平等をうたう唯一の教えであることでも真実経であるといえます。釈尊がアジアの古代社会で平等を打ち出したことは、当時からすれば画期的なことでしたが、法華経において二乗作佛の説をとらえていることによって以後の仏教に対してはもちろん、文化史、思想史に決定的な影響を与えたといえましょう。

ただ、一つ申し上げておかななくてはならないのは、開三顯一という法華経迹門の説について、中国でも論争の的になったのが、三乗の中の菩薩乗が即、一佛乗なのか、菩薩乗と一佛乗は違うものなのかということで、この解釈の対立を三車家、四車家と

称しています。詳細は他の機会に譲りますが、天台大師は四車家の立場で、仏教には四乗があり、声聞、縁覚、菩薩の三乗は仮に設けた方便の教え、一佛乗が真実、法華経の教えであり、一切の経々は法華経に統一されるのであるという説をとりました。もちろん、御祖師様や門祖もその解釈のもとで、法華経によって声聞、縁覚の成仏を認めるのは、あくまでも法華経の一佛乗に声聞や縁覚、法華経以前の教え（爾前経）を聴聞した菩薩が昇進し帰入してこそ救われるのであると教えて下さっています。つまり、そのまま静止をした状態で平等を認めるのではなく、法華経に説かれる菩薩行を実践してこそ誰でも成仏できると平等を説くのが法華経なのです。